

有坂隆道編

『日本洋学史の研究Ⅱ』

沼田次郎

本書は昭和四十三年に有坂氏が編者として公けにした同名の論文集に次ぐ第二集である。収める所まず編者の「親試実験主義の展開」を巻頭に山崎彰「『和魂洋才』の思惟構造の萌芽」杉田玄白を中心に、「成瀬不二雄「近世日本の洋風画における前期と後期」主題と画法」、菅野陽「司馬江漢の洋風画と蘭書」、有坂隆道「司馬江漢著『独笑妄言』」、山本四郎「小森桃鳩伝研究」、島尾永康「宇田川榕庵とラホイシール『舎密原本』」、上田稔「緒方洪庵をめぐる社交的側面」、末中哲夫「大垣藩医『江馬元益』」の計九編である。各編いずれも別々の問題を取扱った論文をあつめたものなので、まずは順序として、簡単でも一応各論文の内容をかいつまんで紹介するのが評者としての義務であろう。

巻頭に据えられた有坂氏の論文はかつて昭和二十八年『ヒストリア』第八号に掲載された論文の再録である。近世初期における朱子学的医学である曲直瀬道三の医学に対する批判としておこった古医方の学風すなわち事実に基づき実験を重んずる先物実試・

親試実験主義の医法を、その代表的学者としての名方屋玄医から後藤良山・香川修庵・山脇東洋・吉益東洞について綿密に跡付け、とくに山脇東洋のそれが西欧の解剖医学を受容する基盤となりえたことを指摘したものである。このような古医方と蘭学との密接な連関、いかなれば「古医方から蘭学への転移」は今日ではほとんど常識的な見解と成っているが、発表当時は大きな反響をえたものであった。儒学思想にふかい理解を持つ有坂氏のこの指摘は今日においてもその光りを失わず、再録とはいえ、本書の巻頭論文たるにふさわしい重みを持っている。

続く山崎氏の論稿は、このような古方派についての認識から出発して、蘭学の創始者ともいべき杉田玄白の著書「形影夜話」に見える医論の蘭漢折衷的性格を指摘し、それを以て「和魂洋才」の思惟の萌芽として捉える。山崎氏は、玄白が古方派的親試実験主義の基礎に立って「日本一流の外科」の新しい創設を目指しながらその過程において西欧解剖学の成果に触れて目を開かれ、「解体新書」の翻訳研究を通じて西欧医学の法則性を把握するに至ったが、薬方・治方の現実の上から漢方医学についての評価を新たにし、蘭漢折衷の医学に到達したものと考える。そしてその論理化のために著したのが「形影夜話」であるとし、「形影夜話」の記述を検討して、このようないわば玄白の思想的転換は、寛政一享和年間を中心とする日本をめぐる海外情勢に彼が触発されたことと、そのために享和元年以降彼が兵学研究に関心をもち、「軍書会」その他の会合に出席した機会に荻生徂徠の「鈴録外書」に接して蘭漢折衷の論理化のヒントを得たことに始まる、とするものである。

「形影夜話」における玄白の思想と論理とくに「鈴録外書」の問題については佐藤昌介氏の指摘(同氏『洋学史研究序説』、昭和三十一年)があるが、山崎氏の見解は当然佐藤氏への批判となり、またその否定に到達する。しかもとも「形影夜話」の記述は、抽象的というか曖昧な点が多く、とくに時間的経緯が曖昧化されているので、山崎氏の解釈もキメ手を欠く憾みがあるが、佐藤氏の見解は、玄白と蘭学との関係を「形影夜話」によってのみ捉えて「蘭学事始」の説く所を無視している憾みがあり、また「形影夜話」の記述の解釈に当たっても丸山真男氏の所説に忠実なあまりに少しくその生硬且つ性急な適用に過ぎた傾きなしとしない。

「蘭学事始」の記述に記憶がいや事実の誤りがあることはよく指摘されることであるが、さりとてその故を以て一概に「蘭学事始」の記述を無視することは当を得ないことである。やはりわれわれはこの問題を扱うに当たっては、両者の記述に十分の批判を加えた上であらためて「形影夜話」の記述を虚心に解釈してみること、またその上で「和蘭医事問答」その他の史料とも併せて検討して把握することが必要ではないか。山崎氏の指摘はなお十分ではないが、このような意味で示唆に富む見解であると思う。

次に成瀬氏及び菅野氏の論文は、以上とは全く趣を異にした美術史の論文であって、成瀬氏は、いわゆる南蛮紅毛美術としてとり上げられてきた洋風画を、第一期洋風画・第二期洋風画として捉え、とくにその主題と画法とを中心に両者を比較したものである。第二期においては、オランダを通じて将来される銅版画などの模写により西洋画の実感描写を体得すること、つまり画法が中心と成っていること、こうして洋風画が東洋画とは異質の画法と

して日本絵画のなかに定着しはじめた、と説く。

成瀬氏という第二期洋風画家として有力な地位を占めた司馬江漢の画業として銅版画の製作が大きな比重を占めていることは周知のところであるが、彼の銅版画・洋風画には多くの場合外国にその原画に当る絵画があった。この点について菅野氏はこれまで数々の原画を発見してきたが、本書の論文でも同じ意味でいくつかの江漢の画業についてその原画をオランダに求め、彼のいう「職人ブック」とか「コンスト・シキルド・ブック」なる蘭書について詳細に考証している。

この江漢の数ある著述のうちに「独笑妄言」というものがある。伝本が少く、かつて後藤捷一氏所蔵本を紹介した有坂氏が(昭和二十九年『ヒストリア』第一〇号)そのうち岩瀬文庫本を得てそれによって厳密な対校を加えた結果をここに載せてある。江漢の「晩年、隠退期の最初の成書」と氏が言うところの「独笑妄言」について、現在もつとも完備したテキストということが出来る。

次に島尾氏の論文は純然たる化学史の専門家としての立場から、宇田川榕庵の化学研究の全貌を乾々齊文庫に蔵する榕庵の手稿によって詳細に研究し、榕庵がラヴォアジエールの化学を研究し十分に理解していたことを明かにして、化学史上におけるラヴォアジエール化学の伝播の上での位置付けを試み、榕庵が日本の化学の上での命名法を確立したこと、その意味で、日本の近代化学はラヴォアジエールの受容で始まった、という。

最後に順序不同ながら、山本氏・末中氏および上田氏の論稿はいずれも著名な蘭学者についての克明な伝記的研究ということができよう。山本氏による京都の蘭学者の伝記的研究は既に定評の

あるところであるが、京都の蘭学を代表する一人である小森玄良（桃塙）の伝記は本稿において余す所なく描かれていた。末中氏の論稿は、今日まで多くの史料がその子孫の家に家蔵されているにも拘らず研究されること少なかった大垣の江馬氏の歴代のうちとくに江馬元益（春齡）について研究したものの。元益が明治二十四年歿するまでの克明な手稿「藤渠漫筆」が紹介されているが、幕末から明治にかけて生活した洋（蘭）学者としての、また地方郷村の指導的知識人としての意識・思考がその中に率直に現れており、近代の成り立ちにおける洋（蘭）学者の役割なり社会的地位を考へる上で興味あるものがある。また上田氏の論稿は、この誰知らぬものもない蘭学の巨匠について、その伝統的教養としての和歌および和歌を通じての交友関係という側面を追うことによって、緒方洪庵の幕府への出仕という問題に対して、従来あまり人の考へなかつた問題を提出している。

以上、紙数に限りがあるため、興味をそそられた点を中心にきわめて簡単に各論文の論点を要約したので、執筆者の意図を誤り伝えるところがあるかもしれないが、ともかく一応各論文の内容を紹介したつもりである。各論文それぞれ個別の、独立した主題を取扱ったものであり、全体として一貫した主張はないが、しかし全体を通じて、大体編者有坂氏の立場すなわち蘭学との関連において伝統的思想を重視する立場がうかがわれる、と言ってよからう。

ところで歴史的立場からする洋（蘭）学史の研究は、明治以降まず個別の洋（蘭）学者の伝記的研究ないし個々の著訳の書誌的研究

として発足した。爾来今日までその成果は量においては夥しいものがある。また質においても相当すぐれたものを生み出している。そこでこのような成果の上に立って、また一方ではそれらと並行して、昭和の初期あたりから、オランダ側の史料を使用する道が開けたことと、歴史学方法論の進歩に伴って洋（蘭）学のイデオロギーとしての側面を重視し、封建社会内における洋（蘭）学の役割を明かにしようとする研究が始まったことによつて、今日ではこのような意味での歴史的研究の成果は、著しく精緻の度を加えた伝記的・書誌的研究の成果とともに、きわめて多彩な総りを見せている。しかしその反面、徹に入り細をうがつのあまりに、趣味的・回響的に墮する嫌いもなしとせず、また一方では、洋（蘭）学の科学としての内容が歴史家にとって理解困難なところから、とかく西欧科学史の理解の図式的適用とか、あるいは観念的な歴史法則の安易な適用に満足する惧れもなくなつた。

しかし今日では、関係史料の開放、地方的な史料の発見と開放が急速に進んでおり、また戦前には夢想だにできなかったくらいオランダ史料の利用が容易に成つて現状である。われわれは単に従来の著訳本位の、また洋（蘭）学者の家伝本位の伝記的研究から脱却して、このような内外の史料、とくに書翰・日記などのオリジナルな史料の使用によつて、洋（蘭）学者の伝記をその生涯にわたつて再吟味する一方、その著訳、その中に含まれる学説・思想だけを切りはなしてとり上げるのでなく、常にそれをその生涯とその時代背景との上に密着させて総合的に把握する必要がある。とくにその思想上の進歩性・啓蒙的役割を重視されてきた人ほどその必要を感じる。次にその際にもまず洋（蘭）学の著訳の内

容的理解が前提に成るが、洋(蘭)学の内容がほとんどすべての科学の分野にわたっているために、われわれに理解困難な所が多く、従ってどうしても科学史的立場からする研究者の援助と協力を欠くことができない。また著訳それ自体の検討は科学史家の協力によつて一応可能と成るにしても、成書としての著訳書自体の理解だけで果して十分かという点、それにも問題がある。原典となつた西欧の原書との比較検討を行なうことによつて、西欧科学の理解の程度(すなわち洋(蘭)学者の学力)や西欧科学のいかなる事項・部分がいかにとり入れられたか(撰取の意識と態度)もはじめて明かになるであらう。洋(蘭)学の思想的影響、伝統的思想との関係如何なども、以上の検討を欠いては不十分たるを免れない。

洋(蘭)学と伝統的思想との関係は直ちに洋(蘭)学それ自体の内容、洋(蘭)学の性格を規定するし、それはまた直ちに洋(蘭)学が近代社会の成立にいかにかかわるかの問題にも連なるわけで、この点からする幕末の思想状況の研究の如きも、今日ではまだ未開拓の部分が多いのである。

同時にまた洋(蘭)学には、その時代の先進国としての西欧諸国の文化の世界的伝播(一方から云えば撰取)の成果という性格が存する以上、洋(蘭)学史の研究にあたっては、そのような文化伝播の一つのパターンとして捉えることも必要であらうし、とくに中国における西欧文化の受容と対照して考えることが今後必要であると思ふ。

以上いずれも言うは易く行なうは難い問題であるが、洋(蘭)学史研究についての私見を述べた。本書に収められた論文はいずれもこれらの困難な注文にこたえるものをその中に含んでおり、ま

た部分的には既にそれにこたえているものもある。私はここに載せられたような個別研究が今後いよいよその精度を高めるとともに、この時代の思想体系にふかい知識と理解を持つこの編者によつてそれらが総合せられて、より高次の「日本洋学史の研究」Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ……が現れることを期待するものである。

(A5判 三〇六頁 創元社刊 定価一八〇〇円)
 (東京大学教授・)